読書ノート

2016.8.23/小林

極楽浄土と神道、極楽浄土とｷﾘｽﾄ教の天国

* 仏教の極楽浄土は、一言でいえば視覚的・聴覚的に「清浄で美しい」ところ（7.21大草さん報告）
* これに刺激されて二点コメント
* 文献によれば神道は穢れを嫌い、沐浴\*･潔斎\*･禊ぎ\*･祓い\*で身体を清潔にするのが基本とのこと、神社の境内は通常は掃き清められており、礼拝する前に水で口をすすぎ、社殿の床はよく磨かれており、神主・巫女の衣装は清潔感のある白が基調。仏教の極楽浄土の「清浄で美しい」ところと重なる部分があるが、日本の文化とどのような関係があるのだろうか？（\*水浴び、酒肉等を絶つ、穢れをおとす）
* 仏教の極楽浄土をキリスト教の天国と比較すると見えてくるものがある。
* キリスト教の天国とは（諸説あり）、「神が直接統治する国」という意味であり、全知全能の神が統治する天国では完全な正義が実現され、不公平や不平等、不正がない、神に選ばれた正しい人だけが死後に天国にいける、天国にはわざわい・悪行・苦難・悲しみなどは存在しない（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄから）
* 要するに、天国は「あらゆる行為が倫理的に行われる」ところであり、「清浄･美」は考慮されていない
* その一方、極楽浄土は「清浄で美しい」ところであり、「倫理的であること」は考慮されていない
* そうすると、日本人は「清浄･美」を重んじ、「倫理的であること」を軽んじる傾向があるのか？

　　　

〈清潔感のある境内〉　　　〈磨かれた白木の床〉　　　　〈神主さん〉　　　　　　　〈巫女さん〉

コンプライアンス違反事例

海自・護衛艦「たちかぜ」いじめ自殺事件（大島千佳「自衛隊の闇」（河出書房新社、2016年4月））

* 2004年10月、T一等海士(21)は京急・立会川駅で飛び込み自殺、遺書に上官の佐藤二等海曹(34)を名指しして「絶対に許さない」「呪い殺してやる」などのうらみの言葉を残していた
* ちなみに、自衛隊員の自殺件数は2004年100人、2005年101人、2006年101人、自殺率（2006年）で見ると、自衛隊10万人あたり38.6人、国家公務員23.1人で自衛隊員の自殺率が際立って高い
* 佐藤二等海曹は、艦内電測室で繰り返しTを含め数人の部下の身体にガス銃でBB弾を撃ち当てる、殴る、蹴るなどの暴力をふるい、かつ脅迫によりわいせつ画像DVDを数万~十数万円で買わせていた。艦内にガス銃を持ち込んでいることを知った上官は持ち帰るよう注意したが「訓練に必要」と反論され黙認した形になっていた（！）。Tの背中に多数のアザがあるのを入浴中に同僚が見ており、Tの顔面にも複数のアザがあるのを見た者がいる。ちなみに、他の被害者いわく「撃たれたらほんとうに痛い・・・当たったら直径1~2センチぐらいの青アザがバッと出て、血がにじむ・・・」
* 母親とTの姉が国に対して損害賠償請求訴訟を提訴（父親は自殺後数年で病死）
* 2011年1月、横浜地裁は暴行に対する慰謝料440万円を認めたが、自殺を予見するのは困難とのことで海自側の安全配慮義務違反を否定→原告控訴
* 2014年4月、控訴審判決では海自側の安全配慮義務違反を認定、母親とTの姉合計で約7,300万円の損害賠償を命じた（判決確定）
* なお、2005年1月、佐藤は刑事・有罪となり懲戒免職（ただし、Tへの傷害は被害者死亡で立件されず）
* 裁判の経緯と争点
* Tの自殺直後、海自隊員と思われる人物がTのｱﾊﾟｰﾄに行き大家さんに鍵を開けてもらい部屋から何かを持ち去った可能性あり、海自は否定するも、一説では自衛隊ではいつもの事で証拠隠滅のためと言われている
* 海自はTの自殺原因調査委員会を設置、(1)乗組員190名にｱﾝｹｰﾄ調査、(2)その内67名と面談調査、(3)面談で得られた供述をもとに「答申書」作成（「自殺原因報告書」は作成せずとの説明だったがのちに存在が判明）
* 海自はTの両親に調査結果を報告：「佐藤の暴行等が原因という隊員の供述はなかった」
* 両親は海自報告に納得できず海自に対し答申書とｱﾝｹｰﾄ回答票の開示を請求したが、答申書」は9割以上黒塗り、理由は「防衛機密」、回答票は「廃棄済み」とのことで不開示
* 母親とTの姉は国に対して損害賠償請求訴訟を提起
* 海自の主張：(1)Tに対し行き過ぎた指導はあったが、同様の被害を受けた複数の者が自殺していないこと、Tは欠勤せず勤務していたことから行き過ぎた指導がT自殺の原因ではない、(2)Tには約二百万円のサラ金の借金がありこれが自殺の原因と考えられる→横浜地裁判決は自殺の慰謝料は否定、理由は「海自側に自殺の予見可能性なし」、つまり海自側に安全配慮義務違反なし
* 一審判決後、海自から内部告発者が出た、告発者は海自の元･本件訴訟担当の三等海佐（46）、この三佐は(1)本件訴訟担当のときに情報開示担当者から呼び出しを受け「ｱﾝｹｰﾄ回答票は破棄したことにして請求者に不開示と回答するので承知おき下さい」との趣旨のことを聞いた、(2)その後、訴訟関係資料を収集・整理する過程で箱ファイルに数百枚の回答票があることを知った、ということから回答票は隠ぺいされていると知り、控訴審裁判所に陳述書を提出し、原告側の証人として証言して隠ぺいを明るみに出した
* なお、三佐は陳述書提出の前に、本件法務官に二度（別人）、隠ぺいは正すべきと進言したが聞き入れられなかった
* 一審・二審において、海自側は徹底的に知らぬ・存ぜぬ・記憶にないを繰り返した、たとえば、(1)Tの上官（複数）はTに対する暴行・いじめなど知らない・聞いていない・見ていないと証言、(2)情報開示担当者（退官）は三佐を呼び出したこと・会話したことなど「記憶にない」と証言、(3)海自の訴訟担当者は「箱ﾌｧｲﾙにとじられた数百枚のｱﾝｹｰﾄ回答票なんて見たことない」と証言、海自は徹底して「組織防衛大作戦」を展開→前回報告のように、日本人の自我は身内ともたれ合う自我なので、身内を守るためのウソには罪悪感を感じにくい精神構造（甘えの構造）になっている
* 後日、海自はｱﾝｹｰﾄ回答票を「発見した」と記者会見で発表、いわく「個人ﾌｧｲﾙに綴じられていて気づかなかった、隠ぺいではない」→ここで一句「隠してない　発見したと　ウソかさね」、これを犯罪心理学的に解説すると、一度ウソをつくとウソを隠すためにまたウソをつかなければならなくなり、自分のウソに追い詰められて白状することになる、しかし人間は自分のウソを正当化するためにまたウソをついてしまう、つまり自我の受傷を最小にしようとする
* 三佐の証言後、海自は三佐への報復を開始、「行政文書の管理不適切」を理由に懲戒処分の手続きを開始、(1)「三佐はｱﾝｹｰﾄ回答票を知りながら隠ぺいした」という理屈、(2)陳述書にｱﾝｹｰﾄ回答票の存在を示す内部資料を添付していたがこれは秘密漏えいにあたるという理屈→海自は当初これを内部告発とは関係ない単なる「文書管理の問題」と主張していたが、その後手続きは取り消された
* 三佐は在職中に予備試験から司法試験合格し弁護士資格取得、法務部門への異動を希望するが、部隊司令官より「どの部門も受け入れ拒否している、内部告発は組織人として不適切、そういう人間を受け入れる部門はない、組織人として海自側に立たないと異動希望はとおらない」趣旨の発言あり→正義よりも身内優先のムラ社会の論理まる出しの発言で非常に興味深い

  　

〈「たちかぜ」3,850t〉　　〈佐藤のガス銃とBB弾〉　　　　〈Tの遺書の一部〉

日本文化

俵木浩太郎「新・武士道論」（ちくま文庫、2006年7月）

* 1939生、慶大法卒、ｻﾗﾘｰﾏﾝ10年、同大院教育学博士号、玉川大教授
* 内容は孔子、論語、松尾芭蕉、福沢諭吉、新渡戸稲造、軍人勅諭、山本五十六その他に及び幅広い、以下は第4部の要旨
* 武士道の終焉の始まりは高杉晋作の奇兵隊、農民町人主体の奇兵隊が幕府の正規兵に勝った、その後明治2年廃藩置県で封建君主制消滅→明治6年徴兵制で庶民が武力の担い手になり→明治9年廃刀令で武士の魂である刀が禁止→明治15年軍人勅諭制定（1.軍人は忠節を盡すを本分とすへし、2. 軍人は禮儀を正くすへし、3. 軍人は武勇を尚ふへし、以下略）、この軍人勅諭が武士道の消滅をすすめた、なぜなら軍人勅諭では「文武両道」の「文」が欠落し、「文武両道」が武士の理想だったのに「知性」を軽視する軍人を生み、これが諜報活動の軽視につながり、「情報なしの精神のみ」という観念的精神主義におち入って日中・太平洋戦争に突入、かつて武士の「文」の大部分は四書五経（論語・大学・中庸・孟子・以下略）が担ったが昭和の軍人にはこの「文」が欠落していた
* 真珠湾奇襲（昭和16年12月8日）を指揮した山本五十六は、その直後の書簡で成功した奇襲攻撃について「敵の寝首をかいたとて武士の自慢にはならない」といっており、元・武士の家に明治17年に生まれた山本五十六には「奇襲いさぎよしとしない」武士道が生きていた
* 明治43年の潜水艦沈没事故で艦長・佐久間大尉がのこした遺書には、軍人と天皇の家族的結びつきが見られる、すなわち「謹ンデ陛下ニ白ス　我部下ノ遺族ヲシテ生活ニ窮スルモノ無カラシメ給ワラン事ヲ・・・」と大尉が天皇に直接宛てた遺書を書いている、30～35年後の第二次大戦中であれば大尉という下級軍人が天皇に直接モノ申すことなどできなかった、明治43年当時は、まだ軍人勅諭が描くところの「軍人と天皇の家族的結びつき」が残っていた、すなわち軍人勅諭いわく「朕は汝らを股肱（手足）と頼み、汝らは朕を頭首と仰ぎてその親は特に深かるべき」、これがしだいに「官僚組織」に変化し、天皇は軍事官僚組織の頂点としての天皇に変化していった、つまり官僚組織の論理が武士道を駆逐していった
* 福沢諭吉（1835-1901年）は元・奥平家家臣、「武士道」の本質を「やせ我慢」ととらえ、西郷隆盛の西南戦争（明治10年）における身の処し方を評価した、つまり負けるとわかっていながら仲間を裏切れず専制的政府に反抗する戦争を起こし最後は割腹自殺、福沢はここに武士道を見た（ただし、福沢は全体としては西郷嫌い）
* その一方、幕臣から明治政府の高官についた勝海舟（1823-1899年、海軍卿、元老院議官、枢密顧問官他）と榎本武揚（1836-1908年、逓信・外務・農商務大臣他）を批判、出所進退にはいさぎよい武士の精神が大切、やせ我慢するのが武士ではないのか（なお福沢は、勝とは咸臨丸渡米以来の旧知の仲、榎本とはその助命に力を貸した恩人の立場）
* 福沢が尊ぶ武士道の倫理は非実利的な倫理、たとえば「やせ我慢」とか「強きをくじき弱きをたすける」、その一方で福沢は経済社会発展をおしすすめようとした功利主義的思想家の面ももつ、この相反する二面性は武士道精神＝高い倫理性をもった者が経済社会を担っていくべきという考え方として矛盾なく結びついている、これはﾏｯｸｽ･ｳｪｰﾊﾞｰの「ﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾃｨｽﾞﾑの倫理と資本主義の精神」に通じるものあり（なお、福沢は同書発刊の三年前に死去）
* 新渡戸稲造（1862-1933年）は武士の家に生まれたが、武士道は消えゆくものと悲観的に見ていた、なぜなら武士道は武士階級の「階級精神」であってﾃﾞﾓｸﾗｼｰの進展により武士階級は消滅する、したがって武士道も消滅すると見ていた
* 新渡戸は江戸から明治になって功利主義と唯物主義が支配的な倫理思想になると懸念していたが、これに拮抗すべき倫理思想はキリスト教のみと考えていた、新渡戸自身はｸｴｰｶｰ教徒（ﾘﾍﾞﾗﾙなｷﾘｽﾄ教の一派）であったが、日本におけるｷﾘｽﾄ教の布教は困難と考えていた、その理由は(1)日本人はすでに儒教思想にもとづく高い倫理性をもっていること、(2)ｷﾘｽﾄ教の倫理体系は「罪」を認めてその「赦し」を求めることだが、儒教思想とは異質な思想、(3)外国人宣教師は日本の儒教思想や歴史的背景を学ばずに布教しようとしている→これではｷﾘｽﾄ教布教は困難
* このような背景があって、新渡戸は武士道の倫理性に期待していたが、新渡戸は武士道を消えゆくものと見ていた
* しかし、著者いわく、武士道が階級精神だとしても普遍性があれば階級と時代を超えて生きのびる、武士道もしかり、「論語」という二千数百年前の人物の言行録は現代でも生きている
*    

〈佐久間艦長の遺書冒頭部分〉　 〈若き日の勝と晩年の勝〉　 〈晩年の榎本〉 〈Max Weber〉

倫理学・心理学

1. ﾍﾞｲｻﾞｰﾏﾝ・ﾃﾝﾌﾞﾗﾝｾﾙ共著「倫理の死角　なぜ人と企業は判断を誤るのか」（NTT出版、2013年9月）
* 以下は第3章、4章、5章、6章（P.55-185）の要旨

第3章　なぜ自分の倫理観に反した行動をとるのか？

* 内集団びいき：人は自分と共通点ある人を優遇する傾向あり、白人の採用担当は黒人を落として白人を採用する
* 日常的偏見・無意識の偏見：たとえばPCの射撃ｹﾞｰﾑで白人ﾌﾟﾚｰﾔｰが武器を持っていない人を誤射する確率はその人が黒人であった場合により高い確率になる。これは白人が黒人に対して偏見をもっているから
* 自己中心主義のﾊﾞｲｱｽ：原告と被告に提示された証拠は同一なのに原告・被告とも自分に都合よく証拠を解釈して自分が勝つだろうと思ってしまう、米国と中国の温室効果ガス削減交渉で交渉がまとまらないのはこのﾊﾞｲｱｽが働いて自国の主張のほうがより正当だと考えてしまうから
* 未来の過剰な割引：目先の利益を偏重する傾向があって真に倫理的な選択ができなくなる、たとえば地球温暖化問題（化石燃料は低ｺｽﾄ）、財政赤字問題（福祉予算は削減せず借金を次世代に先送り）

第4章　なぜ思っているほど倫理的に行動できないのか？

* 意思決定前－予測の誤り
* 新薬の臨床試験に参加するのが倫理的行動だが、実際に参加を求められると不参加はめずらしくない
* 年始の「今年の目標」が三日坊主で終わるのも同じこと、続けられると予測したが実際には続かなかった、
* 意思決定するとき－「したい」自己と「すべき」自己
* 人間は「したい」ことをしてしまうもの、日常的には「すべき」ことを認識しているが現実に決断するときは「すべき」ことは消しとんでしまい「したい」ことを選択する
* なぜなら、決断するときには具体的な状況が考慮の中に入ってきて、そのとき「すべき」は単なる原則になる
* 米･ﾌｫｰﾄﾞ社の「ピント」の欠陥問題（ﾗﾙﾌ･ﾈｲﾀﾞｰの活躍でProduct Liabilityが認められた）では、ﾌｫｰﾄﾞ社は欠陥改良ｺｽﾄと人身事故の賠償ｺｽﾄを比較して改良しないと意思決定した→なぜか？
* 人間は自己保存の本能的欲求にしたがって意思決定する、企業においては他社との競争に勝ちより多くの利益を得たいという本能的欲求である
* 意思決定した後－正当化
* 非倫理的な決定をしたのではないかと不安に思う、たとえば賠償ｺｽﾄにもとづいて決定してよかったのか？
* 正当化の理由づけをする：やむをえなかった、例外としてそうしただけ、その決定に好ましい面を見つけようとする（全社員の生活を守るためだ）、責任転嫁する（最終決定は社長がした、私じゃない）

第5章 なぜ他人の非倫理的行動に気づけないのか？

* 動機づけられた見落とし
* 自分に不利益がおよぶ場合他人の非倫理的行動を見落とす傾向がある（いやなものは視野にはいっていても認知としては見えていない）
* たとえば、公認会計士と企業の関係においては監査報酬に動機づけられて不正経理が見えなくなる、見えたとしても都合のよい解釈をしてシロと判断してしまう
* 間接性による見落とし
* 非倫理的な行為であってもそれが間接的におこなわれた場合、批判を受けにくい
* つまり、非倫理的な行為を第三者にやらせた場合、やらせた本人よりもやった第三者がより強く非難される傾向にあり、背後に隠れた「主犯」は見えにくい
* 段階的エスカレートのわな
* ゆでカエル現象、倫理基準が少しずつ下がっていくとﾚｯﾄﾞﾗｲﾝを下回っていることに気づかずに大きな倫理違反をしてしまう、「今回は例外的に許容しよう」が繰り返されるといつのまにかﾚｯﾄﾞﾗｲﾝを大きく下回っている
* 結果偏重のバイアス
* 結果から原因行為の倫理性を判断してしまう傾向にある、たとえば、新薬の試験データをねつ造して認可を得た場合、その後副作用の事例が出てこなければ「ねつ造もまあいいか」と思うようになる
* 顔の見える犠牲者効果
* 非倫理的行為の被害者が自分の知った人である場合その非倫理性に気づきやすい、見ず知らずの人であれば非倫理性に気づきにくい（ｼﾘｱ空爆、自爆ﾃﾛ）

第6章　なぜ倫理的な組織を築けないのか？

* 報酬システムのゆがみ
* 米国で詐欺行為の告発者に損害賠償金の一部が与えられる法律が制定されたが、告発者は被害が広がるのを待って告発するようになった（ﾓﾗﾙﾊｻﾞｰﾄﾞ）、弁護士、ｺﾝｻﾙ等の時間単金制は過大申告を生む傾向がある
* 報酬システムは利用者･社員の立場になって制度設計することが必要
* 制裁システムの思わぬ副作用
* ﾙｰﾙ違反に罰金を科すとﾙｰﾙを守るか否かをｺｽﾄの問題と考えてしまう
* 米国で保育園のお迎え時間を守らない親に罰金を科したら「罰金を払えば遅れても良い」という考えになり遅れる親が多くなった、その後、罰金を増額したら遅れる親は少なくなったが、倫理の問題と考えなくなった
* 善行の免罪符効果
* 倫理的行為をおこなった者は少しぐらいは非倫理的なことをしてもよいだろうと考える傾向にある
* 公認会計士の利益相反関係の開示制度は公認会計士が不正経理に目をつぶる可能性を大きくする
* 目に見えない組織文化の影響
* 高評価/高い地位の社員がﾙｰﾙ違反していると「ﾙｰﾙ違反も許される」という暗黙の組織文化を生む
* ﾙｰﾙ違反に批判的な社員に対してイジメがおこなわれると、ﾙｰﾙ違反を見すごす文化を生む
* 非公式な組織文化を把握することが重要

第7章　なぜ改革が実現できないのか？　および　第8章　意思と行動のギャップを狭める　：省略

1. 河合隼雄･鶴見俊輔編「現代日本文化論　9　倫理と道徳」（岩波書店、1997年5月）
* 以下は、P.45-68海老坂武\*「倫理とｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰ」の要旨（\*1986年「シングル･ライフ」がﾍﾞｽﾄｾﾗｰ）
* ｵｳﾑ真理教事件、南京虐殺等々の事件構造はすべて「上の者が命じて下の者にやらせた」、この構造のもと集団の凝集度が強い場合事件は発生しやすい、それでは、下の者が盲目的に命令に従うのはなぜか？
* 南京虐殺事件において上官命令を拒否した沢田少尉の例あり、それは彼が「陸軍少尉」以外のｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰを保持していたからではないか、たとえば、「父親である私」「僧侶である私」というｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰなどなど、もし沢田少尉が「陸軍少尉」というｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰしか持っていなかったなら、彼は盲目的に命令に従っていたのではないか
* 倫理的判断に直面したとき、複数のｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰを持った「私」であることが大切ではないか→「○○会社の社員」だけでなく「夫」「父親」「その他」のｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ、このためには家庭･家族･地域を大切にし、趣味を持つことが複数のｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰを持つために大切ではないか（「趣味の○○研究家」「町内会の幹事」「少年野球の監督」など）

以上